

発掘調査の概要

藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第205次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、昨年5月から12月まで、藤原宮大極殿院東北部において発掘調査を実施しました。11月7日（土）に現地見学会を開催したあとは、藤原宮造営期の遺構の状況確認を目的に調査を進めました。

造営期の遺構の中で特筆すべきは、東面回廊基壇の下からみつかった2本の木杭です。この杭は、基壇を造る前に地面に打ち込んだもので、基壇を造る時には上部を折り取って、その上に基壇土を積んでいました。杭は直径が4～5cmと細いですが、2本のうち1本は、長さ80cmほどが残っていました。

杭の位置は、南北に延びる東面回廊の棟通りの真下にあたり、みつかった2本の杭を結んだラインは、回廊の中軸ラインとほぼ一致します。このような検出状況・位置を考慮すると、これらの杭は、大極殿院の回廊の位置を設定する際に使用された基準杭であった可能性があります。今回検出した2本の杭は、10mほど離れていましたが、同じような杭をある程度の間隔を空けて打ち、それらを基準として回廊の基壇の幅等が決められたと考えられます。

このような杭は、藤原宮の過去の調査では確認されていません。今回みつかった2本の細い杭は、古代の宮殿建築の造営方法を具体的に示す貴重な証拠といえます。 （都城発掘調査部 若杉智宏）



回廊の基壇の下からみつかった杭（北東から）

藤原京左京三条三坊の調査（飛鳥藤原第204-6次）

都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）では、個人住宅の建設にともなって、藤原京左京三条三坊東南坪、西南坪の発掘調査を実施しました。これまでの周辺での調査成果から、調査地では東三坊坊間路の両側溝や弥生時代の遺構の検出が想定されました。調査区は、東西14.5m、南北3mで設定しました。調査期間は10月7日から10月26日までです。

調査の結果、藤原宮期の遺物廃棄層、東三坊坊間路の両側溝、古墳時代前期の柱穴、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての沼状遺構、弥生時代後期の素掘りの井戸を確認しました。

藤原宮期の遺物廃棄層は炭と大量の土器を含み、これらは東三坊坊間路西側溝の埋没最終段階に捨てられたものです。土器は藤原宮期の須恵器と土師器で、完形に近いものもあります。このことから近辺に宮期の遺構が広がっている可能性があります。

東三坊坊間路の東側溝の幅は約1.0m、深さ約30cmです。一方の西側溝の幅は1.5～2.0m、深さ約30cmです。東三坊坊間路の路面幅は5.5～6.0mと考えられます。また、本調査区内では、約150m南方の第63-7次調査のように条坊側溝を埋めたのちの、坪をまたいだ土地利用は確認できませんでした。

調査地周辺は藤原宮に近接する一等地で、大規模宅地も想定できますが、調査例は多くありません。今後も調査を積み重ねて、周辺の実態解明を進めていきます。 （都城発掘調査部 片山健太郎）



調査区全景（東から）